



私たちの責務

たちばな しょうしん
橋 正信

いよいよ親鸞聖人 750 回大遠忌法要まで余すところ 1 年となりました。50 年に一度のご勝縁を迎えるにあたり、私の思いの一端を申し上げます。

過去の記録から伺^{うかが}える大遠忌法要は 300 回忌からで、本願寺第 11 代顕如宗^{けんによしゅうしゆ}主が厳修され、1561 (永禄 4) 年 3 月に 11 日間お勤まりになったとあります。時は戦国時代、厳しい乱世を生きる民衆の救済願望^{こた}に応える形で^{いとな}営まれたのではないかと考えられます。このご法要が契機となって、本願寺教団は社会に認知されていったともいえるでしょう。以来、宗祖の大遠忌法要は数多^{あまた}の先人の方がたによって大切に営まれ、宗祖のご遺徳^{しの}を偲ばせていただくとともに、お念仏のみ教えに^あ会い得た喜びが^{まも}護り伝えられてきました。

大遠忌法要が厳修される 50 年ごとという歳月は、人間の寿命、または時代社会や歴史変遷という観点からも適切な時間的間隔です。それぞれの時代における民衆の宗教的ニーズを捉え、教団の歩みを振り返り、さらには新たな指針を計画するためには、50 年に一度というところに意義深さがあると思われます。そのため、「新たな始まり - 明日の宗門の基盤作り - 」を指針として宗門が実施しているさまざまな事業は、700 回大遠忌から現在までの宗門のありよう、または課題を総括的に点検し、50 年、いや 100 年先の宗門の基盤を作り、浄土真宗のみ教えが、現代の人々の心の^{ともしび}灯火となることを願いとして展開しております。

50 年前と現代は比べものにならないほど変化いたしました。50 年前は、「戦後」を経て高度経済成長期を迎えた時代であり、多くの人々は未来に対して、明るさや希望を抱いていたように思われます。しかし、50 年後の今はどうでしょうか。地球温暖化に代表される世界的な環境問題をはじめ、1 年間に約 3 万人の方が自死される状況、子どもの虐待など、まさに複雑化^{じやっき}した問題が惹起^{しやっき}しております。

そのような中、宗祖がお勧めになられた「お念仏のみ教え」をいただく私たちは、どのように今の時代を生き抜かなければならないのでしょうか。そのことを共々に考えさせていただく機縁が、このたびお迎えする 750 回大遠忌にあると思ひます。

750 回大遠忌法要のスローガンは「世のなか ^{あんのん}安穏なれ」です。混迷の時代にあつて、一人ひとりが自己中心のありようを見つめ直し、ともに生かさせていただいている「他者」に気づくことが大切です。「他者」を排除する考え方に真の安らぎはありません。善と悪に固執する偏見を破り、対立の構図を解消できるのは仏の智慧と宗祖はお示しになり、さらには、仏法がひろまり、世のなか安穏であることを願われたのです。

私は、執務の基本方針を「伝えよう お念仏の喜びを」としております。浄土真宗は阿彌陀如来の本願の救いです。最も根本的なことは、宗祖親鸞聖人が『顯浄土真実教行証文類』に示された教法と、その本願名号を疑いなく領解して大悲を仰ぐ信心です。親鸞聖人を宗祖と仰ぎ、自らが喜ぶその教えを人々に伝えていくことが大切ではないでしょうか。

ご門主さまは、大谷本廟での750回大遠忌法要のお言葉において「阿彌陀如来のおこころに遇えた喜び、お念仏申す喜びを分かち合い、すべてのいのちが輝く世の中をめざして日々を過ごさせていただきましょう」とお示しになりました。複雑化した問題を抱える現代社会において、お念仏の喜びを伝え広めることが、心温かな社会の実現への肝要といえます。阿彌陀如来の本願の救いに出会い、お念仏のみ教えを自らが聞き喜び、一人でも多くの方がたに伝えていく。そのことが、750回大遠忌に遇わせていただく私たちの責務と考えております。

各御寺院等においても大遠忌法要のご修行など、機運向上にむけて種々ご尽力いただいていることでもあります。本願寺におきましても、各地方における「本願寺展」、「地方都市における法要行事」などを通して機運向上につとめており、今後もさまざまな計画を展開してまいります。

共々に宗門至重のご法要である親鸞聖人750回大遠忌の円成に向け、手を携えて邁進してまいります。

合 掌

(浄土真宗本願寺派総長)